ルカ 9:28-36

9:28 この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

9:29 祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。

9:30 見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。

9:31 二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。

9:32 ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。

9:33 その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。

9:34 ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。

9:35 すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。

9:36 その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟

子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

きょうの聖書箇所は山上の変容と呼ばれている箇所です、福音書中盤の山場です。主イエスが復活の第一予告をしたあとに記されています。一緒に読み進めながらイエスのすぎこし「どこから来て、どこに行ったのか」に思いをはせましょう。

あらすじは、イエスは弟子三人を連れて山に祈りに行った。するとイエスの顔は輝き、服が真っ白になった。弟子たちは眠ってしまったが目が覚めるとモーセとエリアがイエスと話をしている。ペトロは思わず仮小屋を建てようというが、モーセとエリアは消えてしまう。すると弟子たちは雲に包まれ神の声を聞く。
かなり神話的な物語ですが、キーワードをみていきましょう。

＜キーワード＞
１）三人の弟子
彼らはこの出来事の証人となりました。この三人は最後の晩餐のあとのゲッセネマの祈りの時の証人でもあります。
２）白い衣
黙示文学では白い衣は神の民の衣装です。ところでイエスはおしゃれだったのではないかという意見があります。バプテスマのヨハネははだかの上に毛衣だけ衣装ですから、この白い衣をまとったイエスは確かにカッコいい装いです。

３）モーセとエリア

この表現は律法のモーセ、預言のエリア、律法と預言、つまり旧約全体の比喩として用いられる慣用句にもなっています。彼らは去りイエスだけが残ったとは、旧約は終わり新しく新約の時代にはいったことを意味するのでしょう。

４）雲が覆った

雲は神の臨在の象徴です。雲に覆われる、包まれるとは神の慈愛に包まれていることを意味します。

５）これに聞け

神はイエスに聞けと宣言した、ということです。三人の証言から始まり、実際に世界に広め今にいたっています。

＜なぜ 8 日目＞

山上の変容の記事は三つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ）ではほぼ同じですが、ルカ福音書だけが違っているところがあります。

１）「この話をしてから八日ほどたったとき…」

マタイ、マルコでは 6 日となっている日数がルカでは 8 日となっています。

６とか８の数字は復活の予告から何日目だったかを云っています。ルカは 8 日目、マタイ、マルコは 6 日目です。

天地創造は 6 日、神の安息が 7 日目です。ルカはそれに 1 日足して、イエスの日、イエスの時代という意味で 8 という数字を

語ったのではないかとする解釈があります。これはイエスの時代がここから始まるのだというルカ福音書に特徴的なイエス理解にもとずいています。

２）「祈るために山に登られた」

マタイ、マルコではイエスはただ山に登るのですが、ルカはイエスが山に行く理由を祈りのためと説明し、祈りと山上の変容の関係を強調します。

また祈りの内容についても「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について」と記し、イエスの祈りは十字架での死についての祈りであったことを暗示します。

＜眠る＞

イエスが祈っていると弟子たちは眠ってしまいます。

ゲッセネマの時もイエスの注意にもかかわらず、弟子たち（この三人です）は眠ってしまい叱られています。わたしはずっとこのたるんだ態度が不思議でした。

きょうの第一朗読では創世記を読みました。再読します。

> 15:12 日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。
>
> ペトロと仲間は、ひどく眠かった、雲が現れて彼らを覆った。

とてもよく似ていませんか。ここでアブラムは、神と対話しています。つまり祈っています。その祈りの中であのアブラハム

でさえ寝てしまった。ペトロたちが眠ってしまっても非難することはないのでしょう。

宗教定義のひとつに「有限の中にあって無限なるものと合一し、あらゆる瞬間に永遠であること」とあります。
きょうの主イエスは山での祈りで、父なる神と一体になり神の思い、みこころを知りました。ペトロたちはその祈っている姿を「顔は輝き服は真っ白になった」と目撃し、すぐに眠ってしまい、そのあと神の声「イエスに聞け」が彼らに臨みました。
イエスの祈りは神と対話し、今後の活動を再確認することでした。それだけでなく、イエスの祈りは弟子たちに祈りの出来事、栄光の姿、モーセとエリアを目撃させ、神の声を聞かせました。
きょうの福音朗読ではイエスの言葉がひとつもありません。証言によって出来事が記されています。イエスと神がひとつであるというイメージがよく表現されているとおもいます。
イエス逮捕でバラバラになった弟子団はその後立ち直り、教会のいしづえを作った。この三人が栄光のイエスの姿を山で見たから、神の宣言を聞いたから、崩壊の危機から立ち直りイエス・キリストの証人としての共同体をつくることができた、と想像をふくらますこともそれほど見当違いではないように思います。
聖人伝説、おとぎ話のように見える山上の変容ですが、この出来事はイエスにとって十字架への道に専心する力となりました。

また弟子たち、とくに三人の弟子たちにとっては、挫折から立ち上がり、キリストをのべ伝える力となりました。

「悟ろうとするうちは悟れない」という禅の教えがあります。同じように「キリストを知ろうとするうちには、キリストはわからない」のかもしれません。
イエスは死んで、キリストとして復活しました。
イエスはどこから来て、なにをなして、どこにいったのか、イエスの「すぎこし」を輝くばかりの白い衣の山上のイエスの姿を頭の中にイメージして皆さんそれぞれに思い描いてみてください。